

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	黒崎 岳大
論文題目	太平洋島嶼国における国民国家の形成とエリートの変容－マーシャル諸島共和国の現代政治についての動態的民族誌－

### 審査要旨

本論文は、黒崎 岳大氏が、10 年以上費やしてまとめた論文である。黒崎氏は、大学院在学中外務省の専門調査員としてマーシャル諸島共和国に駐在し、その活動を通して現地で多くの知己を得た。専門調査員の任期終了後、そうして得た知己を通して、また新たに開拓した社会関係を通して、長期にわたる文化人類学的フィールド調査に入った。本論文で使われた資料は、こうして獲得した情報を基にしており、多く未発表の一次資料であり、貴重な情報である。加えて、専門調査員当時アクセス可能であった、日本およびマーシャル両政府文書を使っており、これもまた貴重な資料として価値の高い物である。

論文の主旨は、独立して間もないマーシャル諸島共和国の政治的動態である。従来、マーシャル諸島は、ミクロネシアの一つとして見られ、いくつかの首長国の島々として見られてきた。そのため、首長国研究者にとって貴重な資料を提供する場所であった。

黒崎氏は、まず従来から続くこうした見方に反し、いまやマーシャル諸島もグローバリゼーションの波の中で、西洋型近代化政策をとり入れなくてはならない状況を説明し、その観点から、従来型の孤立した首長国のマーシャルではなく、西洋型の国民国家をめざすマーシャルという認識から出発すべきことを説いている。

論文は全 10 章からなり、第 1 章では、理論的議論の対象となるエリートについて、オセアニア研究に焦点をあてながら、従来の研究を概観し、従来のエリート像が、時代に迎合する「無能な」大衆に対峙するものとして、そしてそうした大衆とは明確に一線を画する、選ばれた家系の人々を考へて来たため、エリートの概念が極めて硬直化してきたことを批判する。すなわち、従来の首長国研究では、首長とその取り巻き連中という形で、選ばれた血筋の貴族を想定してきたことを批判している。しかし、現代のオセアニアにおいて、むしろ目を向けるべきは、血筋で選ばれた人々だけではなく、高度な政治判断をなしうる人々をエリートとして考えるべきであり、そうした視点から今マーシャルで起こっている、近代国家をつくらうとしている人々の政策決定のプロセスを見てゆくべきであるとしている。よって、黒崎氏の述べるエリートは、従来のエリートよりも広汎な概念であり、従来型の首長の血筋のエリートと、そうした血筋からはなれた、新たに政治的力をまてきたエリートの両方を捉えることで、より包括的に政策決定のプロセスを見ている。

第 2 章では、マーシャル諸島共和国建国に至るまでの伝統的な社会制度や歴史的過程について記述している。ここで、イロージと呼ばれる伝統的首長のグループと、カチョールと呼ばれる平民に区分される階級社会であったことを強調し、また社会組織は伝統的に母系制リニージに基づいて区分されてきたことを説明している。

第 3 から 5 章にかけて、マーシャルの政治史を述べ、ここで、マーシャルにおいてエリート層がどのように形成されてきたのかを、文献資料およびインタビュー資料に基づいて論述している。この部分で、エリートがいかに従来の見方とちがった、対大衆といったイメージとは異なるかという点を力説している。また、これらの章の中で、いわゆる新興エリート層が形成されてゆく過程について触れている。また、外の(国際的)政治社会的環境の変化によって、エリートの役割が変化して来たのかを述べ、動態的視点を導入してくる。

第 6 章以降、ますます世界システム、あるいはグローバリゼーションの中に組み込まれてくる中で、各エリートがいかに葛藤し、苦悩して選択の道を選んできたのかについて述べることで、現代のマーシャルの政治の仕組みが出来上がって来る様子を明らかにしている。とくに、大統領が選ばれる過程で、旧来型のエリートと、新しい国際環境の変化に敏感に乗りながら、それを力として勢力を伸ばしてくる新興のエリートとの葛藤を詳細

に描写している。特に第 7 から 9 章にかけて、アメリカの核実験の場所として使われたマーシャルのその後の問題処理をめぐって、賠償の取引等をめぐって、旧来のエリートがほとんどなすべもなかった中で、より鋭い新興エリートたちが勃興してくる点など、長期にわたる詳細な調査なくしては明らかにできなかった点が明確になっている。

最後に結論として、論文の主旨である政治の立場から、マーシャルのエリートがどのような立場から、政権の担い手として政策を実行してきたのか、あるいは野党勢力として政府に抵抗してきたのかを明確にできた点、そして従来からのエリートの考え方に一石を投じるべく、固定化されたエリート像を突き崩すことができたのかという点を強調して論文を終えている。

審査委員会では、本論文がマーシャルという比較的知られてこなかった太平洋の新興国家の政治的動態を詳細に明らかにできている点で、労作との評価を下した。特に、第 9 章では、文化人類学の視点かららしい、死生観に触れるなど、多角的視点から新しい見解も披露されているなど、今後のオセアニア学会、現代政治史学会などに与える影響も大きいとされた。また、エリート論を展開する中で、単に政治学の議論にとどまらず、人類学の得意とする小さな社会の中での政治動態を詳細に描写することで、政治学と人類学を繋げる役割も果たせるとの評価があった。さらに、学生の身分では絶対に入ることのできない島、イバイにまで赴き、その社会－政治的動態を述べている点で、課程外博士の論文としての価値があるものと評価された。

審査ではこうした積極的な評価があった半面、問題点も指摘された。まず、論文中の用語の不統一性が問題視された。たとえば、訳語の不統一からくるものとして、論者と審査員の一人が使う訳語、「自由連合協定」を、外務省の訳語である「自由連合連盟」という言葉に断りもなく置き換え、混同して使われ、誤解を招くとの指摘、さらにマーシャル語で階級を表す「アラープ」を「アラブ」と混同している点などが指摘された。また、審査委員の一人からは、論文全体が国民国家の形成に関することであるにも関わらず、その概念規定が最初になされていない点が、論文の理論的枠組みを不明確にしているとの指摘もあった。ただこれに関しては別の委員から、国民国家論を本格的に展開すると、膨大な議論となり、むしろ本論文の主旨がぼやけてくる可能性があり、本論文で示された議論にとどめておくほうがよいのではないかと意見も出された。さらに、太平洋諸島の社会は従来文化人類学者が熱心にフィールドワークを行ってきたところであり、そうした先行研究で考察された社会のコンテクストの中でのエリート論にも注目すべきとの指摘があった。問題点の最後として、不注意による誤字脱字が比較的多い点も指摘され、改善を促した。

こうした比較的多くの問題点はあるものの、また主任審査員の立場からの感想として、文化人類学の総合的視点を踏まえて考えると、本論文は政治にやや偏った歴史研究になっていること、そのため、社会を構成する他の大多数の人々の描写がないこと、さらに、宗教、価値観に関する分析がなく、政治力学的議論に終始した点に不満を残すものの、新しい見解を多く含み、長期にわたるフィールド調査なくしてはなしえなかった人脈を生かした資料収集、そして収集した資料の厚さ、さらに分析が的確なこと、また論文の結論は文化人類学ばかりでなく、政治学や、実際の行政にたずさわる分野の人々にも役立つものとなりうる点を評価して、審査委員会では、この論文を博士の学位を与える価値のあるものと判断した。

氏名 西村 正雄

公開審査会開催日	2012 年 10 月 16 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	Ph.D.(The University of Michigan, Ann Arbor)	西村 正雄
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		高橋 龍三郎
審査委員	早稲田大学人間科学学術院・教授	博士(人間科学)	蔵持 不三也
審査委員	大阪学院大学国際学部・教授		小林 泉

